

秘め事は雨の中

——彼は、雨の日にだけ見かける人だった。

朝から降りはじめた雨は、夕方になり、仕事を終えて帰る頃になってもまだやまない。杏子^{きょうこ}は赤い傘を差して、バス停の列に並んだ。街の中心部にほど近い市立図書館に勤めている杏子。その図書館前にあるこのバス停は、通勤のために普段から使っている。

(……あ、今日もいる……)

常に四、五人は利用者がいるバス停だが、その中に雨の日にだけ見かける若い男がいた。

年齢は、自分と同じ——二十代半ばくらいだろうか。細身で今風の服装の彼は、見るたびに本を読んでいる。バスを待つあいだも、そしてバスに乗りこんだあとも、片手になんらかの本を持って読み耽^{ふけ}っているのが印象的だった。

読んでいる本のジャンルは、ベストセラー小説だったり、自己啓発的な本だったり幅広く。図書館司書をしている杏子は、つい気になってちらりと彼を見てしまう。

(……本が好きな人なのね)

自分がカウンターを担当しているときに、彼を見たことはない気がする。とはいえ、杏子が働く

図書館は大きく、毎日かなりの利用者が訪れる。彼が来ていたとしてもわからないかもしれない。ふと時計を見ると、バスが来るまでにはまだ数分あった。杏子はバッグからスマホを取り出す。メールが届いていたので開いたら、差出人の欄に『孝一』と表示されていた。メールの本文には『ちよつと急ぎで必要だから、金を貸してほしい』という内容が書かれている。

(……もう、またなの)

げんなりした気持ちになつて、杏子はいついたため息を漏らした。

大学時代からつきあっている木下孝一とはかれこれ五年ほど関係が続いているが、このところあまり会っていない。大学を卒業したあと、杏子は図書館司書に、孝一は会社員になった。営業マンの彼は仕事の帰りが遅く、たまに会えても「疲れた」と言つて寝ているばかり。杏子は最近、二人のあいだに隙間風が吹いているのを感じている。

それでも会いたいし、顔を見れば好きだとも思う。だからどうにか続いてはいるものの、つきあいははじめの頃のような熱は、残念ながらもうなかった。

(こんなふうに、お金の話さえなければ……。もつとうれしい気持ちで会いに行けるのに)

『六時には家に着くけど』

杏子がそう返信すると、ややして『じゃあ、七時に俺ん家に来て』というメールが返ってきた。

(いつもは、もつと帰りが遅いつて言うくせに……)

こちらが会いたいと言つたびに、「仕事で帰りが遅いから会えない」と断られていることを思うと、モヤモヤする。営業職なので帰る時間はまちまちな上に遅くなりがちだ、という彼の言葉を、

これまで鵜呑みにしてきた。しかし、それは嘘なのかもしれない。そう思うと同時に、そんな風に考える自分が嫌になつた。

杏子はスマホの画面から目をそらした。胸にちくりと刺さる棘に気づかないふりをする。鬱陶しい天気も重なつて、気分は下がる一方だ。杏子は小さく息を吐く。

孝一は基本的には優しい人だと思ふし、好きだ。それでも、彼の態度が以前とは変わってしまった気がしてさびしいと感じる心は、どうしようもない。

ふと顔を上げると、ちょうど道のおこうからバスがやってくるところだった。杏子はスマホをバッグにしまい、雨の雫が滴る傘を閉じた。

* * *

図書館は午前九時十五分開館のため、杏子は毎朝八時半には出勤している。開館までの時間は、朝礼や返却本の整理、新聞の穴あけやファイリングなど、細かい仕事が多い。そして午前中は力ウンターでの本の貸し出し業務だけでなく、新刊図書を選定会議やレビュー書き、来館者の要望に応じるレファレンス業務に追われ、なかなか忙しい。

午後、仕事が一段落してパソコンに向かった杏子は、そつとため息をついた。

——孝一に呼び出された日から、二日が経っていた。

あの日、約束したとおり午後七時に孝一の家に着くと、スーツ姿で出てきた彼は『今帰ってきた

ところなんだ』と言った。

『で、メールで言った件だけ……』

顔を見るなり玄関でそう切り出され、杏子はため息をついて答えた。

『……一万円でいいの？』

差し出したお金を笑顔で受け取る孝一を、杏子は少し微妙な気持ちで見つめた。

『助かるよ、サンキュ。ここんどこ、飲み会が多くてさ。給料出たら返すから』

これまでも何度か金を貸しているが、孝一から返ってきたことはない。かすかに引っかけかりはしたものの、久しぶりに笑顔を向けられるとそれも些細なことに思え、まあいいかと考える。

しかし、彼は急にそわそわしはじめた。

『それでさ、ごめん。俺、これからちよつと友達と会う約束があつて』

『えっ……』

孝一の目的は自分が持つてくる金だけだったのだと気づき、杏子は言葉を失う。

孝一に会うのは十日ぶりだ。せっかく今日は一緒に過ごせると喜んでいたのに、彼の言葉で気持ちが急速に萎む。代わりにこみ上げてきたのは理不尽な扱いに対する怒りだった。気づけば杏子は孝一の顔を見つめて口を開いていた。

『何それ。友達と遊ぶから私には帰れつて——それじゃ私、まるでATMみたい』

『いや、だからごめんつて』

ばつが悪そうに視線をそらす孝一に、杏子はなおも続ける。

『久しぶりに会ったのに、話すのはお金のことだけ？ 最近は会っても寝てばかりだし、私のことなんか』

『……あー、もう』

杏子の矢継ぎ早な言葉を、孝一は遮った。

『苛つくなあ。それならいいよ。俺急いでるし、金は返すから』

『えっ』

『ほら、これでいいんだろ』

杏子に一万円札を突き返し、孝一は舌打ちしてドアノブに手をかけた。

『悪かったよ、ATM扱いして。——じゃあな』

玄関から外に押し出されて目の前でドアを閉められ、杏子は啞然とした。

（じゃあな、つて……）

自分が言いすぎたのだろうか。……だから彼は、怒ってしまったのだろうか。

そう思ったが、ここ最近の彼の冷たい態度を見ると、言わずにはいられなかったのだ。

——その日のことを思い出すと、杏子の口からはため息が漏れる。二日経った今も、孝一からの連絡はない。彼の様子が気になり、何度もスマホを確認してはいたが、半ば意地になって杏子も連絡していなかった。

（メールくらい、くれてもいいのに……）

ぼんやりと作業中のパソコンの画面を見つめ、杏子はいらいらした恨みがましく思う。

彼を怒らせてしまった後味の悪さと、自分は間違ったことは言っていないという葛藤^{かつら}が、杏子の心を重くしていた。メールすら寄こさないことが、彼の怒りを表しているように思える。また、二日も経つと、意地を張っていた気持ちにも次第に迷いが出てきた。

(連絡が来ないなら、私から謝ったほうがいいのかも……)

本当は納得できないが、そうするしかないような気がする。

つきあいはじめは、こんなことはなかった。孝一は四六時中一緒にいたが、会えないときもまめにメールをくれた。喧嘩をしても長引くことはあまりなく、自分への態度や話し方にも、もつと優しさがあつたように思う。

五年のあいだに変化した関係が、杏子は最近少しつらい。パソコン画面をスクロールしながら、孝一の態度が変わってしまった理由はなんなのだろうと考えた。

気づけば彼はよそよそしくなり、会う頻度^{ひんど}が減っていた。思い返してみても、これといって何かがあつたわけではない。

(……倦怠期^{けんたいき}、つてやつ?)

五年つきあっていて、飽きがきたのだろうか。

彼が変わってしまったと考えていたが、ひょっとしたら孝一は、杏子のほうが変わってしまったと感じているのかもしれない。そう思い至り、杏子は目を伏せた。

——気づけば、もう久しく孝一とそんな深い話をしていない。生活リズムは微妙にずれているし、仕事に共通点もない。こうしてすれ違って会話すらしなくなるなら、はたしてつきあっている意味

はあるのだろうか。

(でも……)

別れを選択できないのは、おそらくまだ彼のが好きだからだろう。

こんなふうにぎくしゃくしても、孝一とやり直せるかもしれないと、杏子は希望を捨てきれなかった。

ため息をつき、ふと窓の外を見ると、朝の晴れ空が嘘のように重い雲がたちこめている。天気予報では晴れだと言っていたが、これから雨が降るのだろうか。

傘を持ってきていないことを不安に思っていたら、カウンターからレファレンスで呼ばれた。

「今行きます」と言つて席を立ち、カウンターに向かいながら、杏子は終業後、孝一に連絡してみようかと考えていた。

* * *

天気予報ははずれ、夕方から雨が降り出した。

遅番だった杏子は、午後八時の閉館のあと、図書館の外に出て途方に暮れた。雨足は強く、あたりにはあちこちに水溜りができはじめている。バス停には図書館の駐車場を抜けて行かなければならず、それなりに距離があつた。しかもこの時間帯はバスの本数が少なくなるため、次のバスまで二十分ほど待たなくてはいいけない。

車通勤の上司が、『送っていいこうか』と言ってくれたのを断ったのは、失敗だったかも……という考えが、杏子の頭をよぎる。

とりあえず孝一に連絡しようと、杏子は図書館の入り口の軒下でスマホを取り出した。孝一に「話がしたい」と言ってみるつもりだった。先日の言い方が悪かったというのなら、謝ってもいい。自分としてはこれから彼とつきあっていきたいし、もし至らない部分があるのなら直そうとも思っていた。

（昔みたいに戻りたいって……話してみよう）

意地を張ってばかりではなく素直に接してみれば、孝一の態度も変わるかもしれない。

そんな希望を抱きつつ孝一の番号に電話をかけた途端、『この電話はお客様のご希望により、お繋ぎすることができません』というアナウンスが流れた。杏子は驚いてスマホを耳から離し、まじまじと画面を見つめる。

（えっ……？）

電話番号は登録されているため、間違いようがない。もう一度かけても同じアナウンスが流れ、杏子は混乱した。

しばらく考えて、自分の番号が着信拒否されたのかもしれないと思い至る。

まさかと思いながら『連絡ください』とメールを送ると、『User unknown』というメッセージがすぐに返ってきた。

（メールも、受信拒否されてるかアドレスを変えられてる……）

呆然としていた杏子は、やがてじわじわと事態を呑みこみはじめる。

孝一は、自分を切ったのだ。おそらくこのままフェードアウトするつもりで、彼が一方的に連絡の手段を断ったのだろう。杏子はスマホの画面を見つめた。

（……………どうして？）

確かに最近、自分たちの関係はぎくしゃくしていた。孝一は会ってもどこか素っ気なく、杏子は不満を抱いていた。ひよっとしたらそんな気持ちだが、態度に出ていたのかもしれない。

だが、こんな終わり方はひどすぎる、と思った。

このあいだのことが、それほど彼の氣に障ったのだろうか。——あるいは他に何か理由があるのだろうか。

考えてはみたものの、思い当たる節はない。

つきあいはじめてからの五年間、いろいろなことがあった。喧嘩もちろんしたが、こんなふうには話すことすら拒否されたのははじめてだった。

だからこそ、連絡を断たれたのは、彼が本気なのだという表れのように杏子には思えた。

（別れ話もしたくないってこと……？）

雨足が強まり、図書館の軒から大量の雨の雫が落ちていく。やりきれない気分であつむいているうちに、じわりと目が潤んだ。

さまざまな思いが心の中を渦巻く。杏子は唇を噛んで頬に伝った涙を拭いた。

まさかこんな形で終わりにされるとは思わなかった。呆気なく五年の時間をなかつたことにされ

ると、まるで自分がなんの価値もない人間のように感じる。

しばらく図書館の軒下^{のきした}に立ちつくしていたものの、いつまでもここにいっても仕方がない。ため息をひとつついて、杏子はバス停に向かって歩き出す。

降りしきる雨があつというまに髪や服を濡^ぬらした。シフォンのブラウスが肌に貼りつくのがわかったが、もうかまわなかった。

図書館の敷地を抜けてバス停に着くと、目の前の大きな道路を車が何台も水飛沫^{みずしぶき}を上げて通り過ぎていく。行き交う車のライトや赤いテールランプを見ながら、杏子は無人のバス停に一人で佇^{たたず}んだ。

(……私のことが嫌になったんなら、そう言えばよかったのに)

言われたら言われたでショックだったかもしれない。でも、一方的に終わりにされるよりはほどこまじだ。

——これまでの時間はなんだったのだろう。大学時代、友人の紹介で知り合って、すぐに孝一はつきあいたいと言ってきた。彼の熱意にほだされ、杏子はつきあいをOKした。

彼と一緒にいる時間は、楽しかった。ときには喧嘩^{けんか}もしたが長引くことはなかったし、二十六にもなると結婚する友人が出てきて、いつか自分たちも、と杏子は自然に思っていた。

(私の独りよがりだったのかな)

そういえば、彼の口から将来についての具体的な話が出たことはなかった。

本当はずっと前から、孝一の気持ちは冷めていたのかもしれない。そして自分は、それに気づい

ていなかった。

そう思うと、杏子の心は苦い気持ちでいっぱいになった。

(馬鹿みたい……私)

大きく息を吐き、杏子は頬に流れた涙^{なみだ}を拭う。

そのとき、目の前を一台の大型バイクが通り過ぎた。しかし、すぐにUターンしてきてバス停の前で止まる。

不思議に思っていて見ていると、運転手がヘルメットを脱ぐ。その顔を見て、杏子は相手が見覚えのある人物だと気づいた。

(いつも雨の日に、このバス停で本を読んでも——あの人?)

明るすぎない色の髪にすっきりとした頬^ほ、どこか懐^{ひとなつ}く見える目と甘い顔立ちが印象的な、同年代の男だった。

雨は濡れながら立っている杏子に、彼は突然声をかけてきた。

「——たまにバスで会いますよね?」

「えっ……そうですが、あの」

「ここで何してるんですか?」

話しかけられると思っていなかった杏子は、戸惑^{とま}いながら答える。

「バスを……、待ってるんですけど」

泣いた顔が恥^{はにか}ずかしく、目をそらしてざりげなく頬を拭う。

気まずい気持ちがかみ上げていた。泣き顔ですぐ濡れになっているところなど、本当は誰にも見られたくはない。この人はどうして声をかけてきたのだろうと思っていると、彼は言った。

「……ひよつとして、泣いてます？」

不躰な言葉にじわりと頬が熱くなり、杏子は咄嗟に否定する。

「泣いてません」

(なんなの……この人)

彼がどういふつもりなのか、まったくわからない。たとえ泣いているように見えたとしても、普通は見えて見ぬふりをするだろう。ほぼ知らない相手なら、なおさらだ。

早くいなくなつてほしいと考える杏子を、彼はじつと見つめてくる。

「でも……」

何か言いかけた彼は一度口をつぐみ、気を取り直したように言った。

「よかつたら後ろ、乗りませんか？」

「えっ？」

「ヘルメット、もうひとつあるんで。送っていきますよ」

「そんな……あの、結構です」

唐突な提案に驚き、慌てて杏子は断る。それにかまわず、彼は後ろのシートを開けてヘルメットを取り出すと、につこり笑つて差し出してきた。

「どうぞ」

「あの、私、ほんとに」

「送ります。いつまでもここにいたら風邪を引くし、そんな状態じゃバスにも乗りづらいでしょうし」濡れた服のことを言っているのか、それとも泣いている顔のことを言っているのかはわからなかったが、確かにこのままバスに乗ることは気が引ける。杏子が黙りこんでいると、彼はバイクから降り、こちらまで歩いてきた。

——彼の背がとても高いのだと、杏子は目の前に立たれて気づいた。

見上げた杏子の頭に、彼はヘルメットをかぶせる。そして驚く杏子の手首を掴み、バイクのそばまで連れていった。

「あの、私……」

彼の髪が、降りしきる雨で濡れていく。服の裾で濡れた後部シートを拭った彼は、杏子に微笑んで言った。

「すみません。ちよつと濡れてるけど、どうぞ」

先にバイクに跨り、彼はもう一度後ろのシートを示す。

「早く。車来ちゃうんで、乗ってください」

「えっ？ は、はい」

ためらいながらも半ば押し切られる形で、杏子は後部のシートにぎこちなく跨った。

今日はスカートじゃなくてよかったと思っていたら、彼は突然後ろ手に杏子の両手を掴み、自分の腰に回す。どきりとする杏子を見下ろし、彼は言った。

「危ないから、ちゃんと掴まって」

細身に見えて、彼の体格はしっかりとしていた。急に密着することになってしまい杏子が戸惑っている、彼はヘルメットをかぶってバイクを発進させた。

動き出したバイクが怖くて、掴まる手に自然と力がこもる。

杏子は目の前の背中を複雑な気持ちで見つめた。

雨の中に立っている杏子を見て、彼は気の毒に思ったのだろうか。もしそれでわざわざUターンしてきたのだとしたら、相当なお人好しに違いない。

しばらく走って信号で止まったとき、彼は振り向き、ヘルメット越しのくぐもった声で言った。

「先に俺の家に寄ります。タオルを貸しますから」

「いえ、あの、適当なところで降りしてくれば——」

信号が変わり、彼は杏子の言葉に答えずにバイクを発進させる。

同じバスを使うのだから、彼の自宅も杏子の家と同じ方向なのだろう。申し出はありがたいものの、杏子はすぐに帰ろうと思っていた。

(これだけ濡れているんだから、今さらタオルを借りても……)

バイクには初めて乗ったが、スピードを感じて結構怖い。

なりゆきで彼の体に強くしがみつきのながら、杏子は心の中の戸惑いをそっと押し殺した。

2

バイクは、杏子の勤める市立図書館から十分ほど走って、とあるマンションの駐車場に乗り入れた。おそらく、杏子の自宅からバス停ふたつ分ぐらい離れたところだ。

この程度の距離なら、歩いて自宅に帰れるだろう。停車したバイクから降りた杏子は、ヘルメットを脱ぐと彼に渡して言った。

「乗せていただいて、本当にありがとうございました。私、ここからは歩いて帰ります」

「うちに寄っていただくさい」

「あの、ご迷惑になりますし、本当にここで……」

屋根がついた駐輪スペースにバイクを停めた彼は、予備のヘルメットを後部シートにしまい、自分のものをホルダーにかけると、杏子をじっと見つめてくる。

その眼差しに杏子はひそかにたじろぐ。短い沈黙のあと、彼は言った。

「……言いにくいんですけど、服、濡れて透けてるんですね」

「えっ？」

自分の胸元を見下ろした杏子は、驚きで顔が火照るのを感じた。ベージュの薄いシフォンのブラウスは、彼の指摘どおりキャミソールと下着のラインが透けている。

杏子の顔を見つめ、彼は「言にくい」という言葉とは裏腹に、にっこり笑った。

「だからそのまま歩いて帰るの、どうかと思って。うちの洗濯機、乾燥機能ついてるんで、よかつたら乾かしていただく。そのあいだは服を貸しますし、帰りは傘も貸しますから」

「でも……」

彼にそこまで親切にされる理由がわからない。

杏子の戸惑い^{とまど}を察したのか、彼は「そんなに警戒しないでくださいよ」と言う。

「確かにお節介だと思えますけど、一応顔見知りじゃないですか。見かけた以上、放っておけないですし」

元々人好きのする顔が笑うと、さらに人懐こい^{ひとなつ}印象になる。子どもみたいな邪気のなさに、杏子はわずかに毒気を抜かれた。

警戒しているこちらのほうが、なんだかいたたまれなくなるような爽やか^{さわ}さだ。杏子が申し出にためらっているうちに、彼は「こっちです」と言つてさつさとマンションのエントランスに向かった。

断りきれないまま、杏子は彼のあとについていく。

ちょうど一階に停まっていたエレベーターに乗りこむと、彼が三階のボタンを押す。やがて開いたドアのすぐそばの部屋の鍵を開け、彼は「どうぞ」と杏子を招き入れた。

部屋はLDKで、典型的な単身者用の造りだった。玄関を入って正面のドアを開けると、八畳ほどのリビングになっている。室内は男性の一人暮らしにしては整頓^{せいとん}されていて、シンプルな三人

掛けのソファとテーブルやラグ、そして小さな観葉植物が置かれていた。

リビングの奥にある部屋は寝室のようで、ドアが開け放たれた薄暗い部屋の中には、シングルサイズのベッドや備えつけのクローゼット、大きな本棚が見える。

彼は寝室からタオルと黒いTシャツとハーフパンツを持ってくると、リビングの入り口で立ちつくす杏子に手渡し、キッチン^{キッチン}の奥の洗面所を示した。

「むこうで着替えてきてください。たぶん二十分くらいで乾きますから」

微笑みかけられ、杏子は困惑しながらタオルとTシャツを抱えて、言われるがままに洗面所に向かう。

洗面所のドアを閉めた杏子は、濡れて肌に貼りつくブラウスとキャミソール、クロップドパンツを脱ぐと、タオルで髪と体を拭き、渡された服を着た。下着が透けない黒いものを選んでくれたことに、彼の配慮を感じる。

洗面所を出た杏子から脱いだ服を受け取ると、彼は言った。

「牛乳、飲みますか？ ホットミルクを用意したんで、よかったらどうぞ」

リビングのローテーブルの上には、温かい牛乳の入ったマグカップと砂糖が置かれていた。

（なんでこんなに……親切なの）

用意のいい彼に驚きながら、部屋をぼんやりと眺め、杏子はリビングのテーブルに向かった。そしてカップの前に座る。

湯気が立つカップに砂糖を少し入れて口をつけると、ホッと息が漏れた。

(……あったかい)

五月の半ばとはいえ、夜はまだ空気が冷たい。自分で思っている以上に冷えていた体に、ミルクの温かさがじわりと沁^しみだ。

彼が洗面所から戻ってくると、杏子はカップをテーブルに置き、慌ててお礼を言った。

「あの……本当にすみません。何から何までお世話になってしまつて」

「いえ、たまたま通りかかつてよかった。俺、普段はバイク通勤なんですよ。雨の日だけバスを使うんですけど、今日は夕方から降ってきたので、そのままバイクで帰ってきたんです」

いつもは夕方五時頃に仕事が終わるのだが、今日は職場で用事があって遅くなった、と彼はつけ足した。あの時間に通じかかったのは、本当に偶然らしい。

目が合うと、彼はにつこり笑いかけてくる。その爽やかさが居心地悪く、杏子はぎこちなく視線をそらした。

再度カップに口をつけながら、あのバス停を使うということは、彼の職場は自分の勤める図書館の近くののだなと考える。見たところ服装はカジュアルで、なんの仕事をしているのか想像がつかない。

彼はテーブルのすぐ横のソファに座ると、何かを思案するようにしばし沈黙した。やがて杏子を見つめ、彼は問いかけてくる。

「こんなこと聞くのも、あれですけど……。さっきなんで泣いてたのか、聞いていいですか？」

不躰^{ふしゆ}な質問に戸惑^{とまど}ったが、彼のまつすぐな眼差し^{まなざし}に見つめられると、なんだか拒否しづらい。こ

こまで世話になつておいて突っぱねるのもどうかと思い、杏子は開き直つて答えた。

「別れたんです、つきあっていた人と。別れたつていうか——一方的に終わりにされて」

言葉にすると、その事実にならずきりと心が痛んだ。

自分の中ではまだ納得しておらず、何も消化できていない。そう思いながらも、杏子はわざとなんでもないように言った。

「ひどいですよね？ 五年もつきあったのに、なんにも言わず突然着信拒否されたんです。メールも送れなくて……。お金だって、貸してたのに」

語尾が震えそうになり、マグカップを持つ手に力をこめる。落ち着こうとゆっくり大きく息を吐き、杏子は言葉を続けた。

「本当は少し前から、ぎくしゃくしてたんです。それでも私はやり直したいつて……昔みたいに戻りたいつて、思っていたんですけど」

杏子は孝一とつきあっていた頃のことを思い出す。喧嘩もしたはずなのに、脳裏に浮かぶのはなぜか楽しかったことばかりだった。

「でもきつと、彼のほうは……そうでは、なかったんですよね」

ふいに涙がこぼれて、杏子はカップを置くと急いで頬を拭^{ぬぐ}う。

急にこんな話をされたら、目の前の彼は困つてしまふに違いない。ましてや泣くなんて——そう思いながらも、涙をこらえることができなかった。

鼻をすすると、無言でティッシュの箱を差し出され、杏子はそこから二三枚抜き取つて鼻をか

んだ。杏子が濡れた目元を拭い、一息ついたところで、彼は言った。

「……泣いていたのは、そういう理由だったんですね」

杏子は無言で肯定する。

「うーん、なるほど。なんていうか……うまく言えないですけど」

彼は言葉を探すように一旦黙り、思案顔で続けた。

「あくまで俺個人の意見ですが、つきあっている相手を突然切るような男とは、別れてよかったんだって考えるのはどうですか？ きつとこの先つきあっても、いつか絶対あなたを傷つけたと思うんです、そういう相手は」

彼の言葉の内容を囁みしめて、杏子は苦く笑い、目を伏せる。

「あなたの言うとおりかもしれないけど……。でも私、こんな終わり方をされて——なんていうか、自信がなくなっちゃって。五年もつきあったのに、私はあっさり捨てられる程度のものなんだって考えたら……なんの価値もないように思えて」

「そんなことないですよ」

杏子の言葉を、彼はすぐに否定した。

「価値がないなんてこと、絶対ないです。相手の人が、ちゃんとあなたに向き合う勇気がなかっただけだと思います。ほら、よく言うじゃないですか？ 最近の若者は人とぶつかるのが怖くて、すぐ逃げるって」

きつぱりと言い切る彼に驚き、杏子は彼を見つめると小さく笑った。

雰囲気からして、彼は自分より少し年下に感じる。そんな彼に『若者』呼ばわりされる孝一が滑稽で、わずかに溜飲が下がった。

（ぶつかるのが怖い……。そのとおりなのかも）

確かに誠意のある人間ならば、きつとこんな終わり方は選択しないだろう。

人ときちんと話すことも、向き合うこともできない——孝一がそういう人間だったのだと考えると、彼の行動に説明がつく気がした。

自分は孝一に依存しすぎたのかもしれない、と杏子と思う。

別れて一人になることが怖くて、ここ最近の彼の態度、そしてそれを不満に思う自分の気持ちから、目をそらしていた。本当は別れることだって少しは頭をよぎっていたのに、行動に移さなかったのは、自分もぶつかるのが怖かったためだろう。——現状を変えたくない、心のどこかで思っていたせいだ。

「……ごめんなさい、こんな話をして」

杏子は小さく謝った。

「さっき、一度通り過ぎたのに戻ってきてくれたんですね？ わざわざそんなことしなくても……よかったのに」

すると彼は「ああ……」と言い、返事をためらうように視線を泳がせる。

不思議に思った杏子が見つめると、彼は少しづつが悪そうに黙りこみ、やがて口を開いた。

「……放っておけなかったんです。あなたのことはいつもバス停で見えて——気になっていたの」

「えっ？」

「俺はあなたに、近づきたかったんです。あなたに対して、以前から好意を持っていました。だからさっき、あそこで見かけて——チャンスだと思った。知り合うきっかけになればいいと思って……。すみません、あなたは彼氏のこと傷ついて……。泣いてたのに」

彼の言葉を聞いた杏子は、急に心の芯が冷めていくのを感じた。彼に抱いていた感謝や好感が、みるみるうちに頑ななものに変わる。

——気になっていたと彼は言うが、一体自分の何が彼の興味を引いたのだろう。そう考えると、苛立ちに似た気持ちがかみ上げてきた。

（私のことなんて……。なんにも知らないくせに）

よく知りもしない自分への好意を語る彼に、杏子の胸に警戒心が湧く。

そもそも彼はなぜ、初対面に等しい自分に親切にしてくれるのかと、杏子は疑問に思っていた。笑顔にごまかされるようについてきてしまったが、彼の気持ちを聞いた今は、下心があったのかと嫌なことを考えてしまう。

孝一のこともあり、杏子は殺伐とした気持ちになっている自分を感じていた。

愛や恋といった感情が、すべて薄っぺらいもののように思えてくる。五年もつきあっていたのに、好きでつきあっていたはずなのに——そんな孝一にあつさり捨てられた現実、目の前の彼に仄めかされた好意を、孝一と同様のひどく軽薄なものに思わせた。

気がつけば杏子は、彼に問いかけていた。

「私が気になるって、どうして？」

杏子を取り巻く空気が変わったことを感じ取ったのか、彼は訝しげな視線を向けてくる。

彼を見つめて、杏子は続けた。

「あなたは私のこと、なんにも知らないのに。名前も、年だって……。それで何が気になるのか、すつごく不思議」

「気になったら、おかしいですか？」

「だって顔しか知らないでしょ？」

間髪容れずに答えた直後、杏子は思いがけず強い声が出たことに自分でも内心驚いた。

杏子の態度から苛立ちを感じ取ったのか、彼は黙りこむ。

自分の気持ちを持て余し、杏子は彼から目をそらした。自分を気にかけて、親切にしてくれたのに——なぜそんな彼に、ここまで攻撃的な気持ちになるのかわからない。

ふつふつと身の内を焼く怒りにも似た気持ちは、制御できずに溢れ出そうとしていた。

「……そっか。私をここに連れこんだのは、だからなのね」

気づけば、そんな言葉が口を突いて出る。彼は驚いたように言った。

「——違います、俺は」

「家に連れこめば、どうにかできるって思ってた？」

杏子は挑発的に彼を見た。

「私をここに入れたのは、『あわよくば』って思ったからじゃない？」

彼は眉をわずかにひそめ、じっと杏子を見つめる。

——言い過ぎだ、と理性は押し留めようとしていたが、杏子は簡単に好意を仄めかしてくる彼が、どうしても許せなかった。

今の自分は、人の好意なんて不確かなものは信じられない。人の気持ちは変わるし、冷めてしまえば、たとえ好きだった相手でも平気で傷つけられるものなのだと、孝一のことでもよくわかった。目の前の彼が一体自分にどんなイメージを抱いているのかは知らないが、いつそそれを壊してやりたいという気持ちが、ふつふつと杏子の中にこみ上げる。

——幻滅して、自分への好意なんか失ってしまえばいい。

そう考えた途端、杏子は彼を見つめて言っていた。

「いいですよ。じゃあ、しましょう」

彼は怪訝な表情になり、杏子を見た。

「……何をですか」

「密室で男女がすることって、ひとつでしょ？」

笑いながら言った杏子の言葉に、彼はかすかに眉を寄せる。

杏子はわざと明るく続けた。

「私、もうフリーなんです。さっき言ったように、彼氏に一方的に切られちゃいましたから。だからあなたとそういうこととしても、全然かまわないの」

彼は無言で杏子を見つめてくる。その強い眼差しに内心たじろぎつつ、杏子は尋ねた。

「だって、そういうつもりで……この家に連れこんだんでしょ」

彼の視線にいたたまれなくなり、最後は尻すぼみがちに言って、杏子はうつむいた。部屋の中はしんと静まり返る。

(私……何を言ってるんだろう)

彼はじっと杏子の横顔を見つめていたが、やがてため息をついて言った。

「……どうしてそんなことを言うのか、わからないです。俺はそういうつもりで家に入れたんじゃない」

落ち着いた彼の声にどこか呆れた雰囲気を感じ、杏子は視線を揺らした。

思わず衝動のままに口走ってしまったが、自分が彼に対してひどいことを言った自覚はある。勝手に彼の言葉に煽られ、苛立って——やっていることは、完璧に八つ当たりだ。

気まずさで押し黙った杏子に、彼は言った。

「俺があなたに好意を持っていると言ったことが、そんなに嫌だったんですか？」

「……それは」

「気になっていたのは確かですけど、別に何もするつもりはありませんでしたよ。濡れたまま帰るのはどうかと思って、親切心で誘ったんです。……でもまあ、男の一人暮らしだし、誤解されるのは仕方がないかな」

彼の言葉に自嘲するような響きを感じ取り、杏子は居心地悪くうつむく。

(何やってるんだろう……私)

罪悪感がこみ上げ、杏子は強く手を握りしめた。

おそらく彼の言うとおりのだろう。先ほどまでの彼の態度には、下心など微塵も感じなかった。むしろその邪気のなさに驚きすら感じていたのだから、自分の発言は完全に八つ当たりで、ひどい言いがかりだ。

熱を持っていた頭の芯が徐々に冷めていき、惨めさで胸がいつぱいになる。杏子は苦く笑って言った。

「……そうよね。どうせ私なんか、あっさり捨てられるような女だし。……たいした魅力もないし、あなたがその気にならないのも、当たり前かも」

彼に拒否されて冷静になった一方、なおも恨みがましくこんなことを口走る自分に嫌気が差す。いたたまれなくなった杏子は、バッグを掴むと立ち上がった。

「……ごめんなさい、もう帰ります。服、返してもらっていいですか？」

「待ってください」

すぐにでもこの場から立ち去りたい一心で、洗面所に向かうとする。

次の瞬間、彼に手首を掴まれて杏子は驚いた。痛くはないが、有無を言わさぬ程度に強い力に、心臓がどきりと音を立てる。

「……あの」

「捨てられたとあなたを馬鹿にしたつもりはないし、魅力がないとも言っていないです」
切りこむような鋭い口調に、杏子は息を呑んだ。

「そんなふうに挑発的な言葉を口にして——俺がなんて答えれば、あなたは満足なんですか？」

ソファに座ったまま自分を見上げる彼の眼差しの強さに、杏子は動揺する。

その目を見て唐突に、自分の言葉が彼を傷つけたのだと気づいた。

彼の気持ちを否定し、親切にしてくれたことすら揶揄した。いくら孝一にひどい扱いを受けて傷ついていても、自分が彼に言ったことはあまりにも失礼だ。

しかし罪悪感を感じる一方で、自分はしよせんこの程度の女なのだという、捨て鉢な気持ちにもなっていた。もう彼にもわかっただろう、と杏子は諦めに似た感情を抱く。自分は彼の親切も好意も、素直に受け取ることができない。彼が好きになる価値のない、惨めで卑屈な女だ。

一刻も早く帰りたくなり、掴まれた手を振りほどこうとした瞬間、彼が口を開いた。

「……あなたがそんなことを言うなら、俺はつけこみますよ」

「えっ？」

「そのつもりで連れこんだと思いたければ、そう思ってくれていいです。あなたがつきあっていた相手と別れたんなら——俺には好都合だ」

彼の言葉の意味を考え、理解するにつれて、杏子はじわりと危機感をおぼえた。自分が言ったことは彼を挑発する内容だったのだと、今頃になって気づく。勢いで誘ってみたものの、本当に彼と寝る覚悟があったわけではない。むしろ断られることが前提で、嫌われたくて口走った言葉だった。思わぬ話の転がり方に、焦りがこみ上げる。

（早く……帰らないと）

「あの、私……」

杏子が失礼を詫^わびて帰ろうとした途端、彼は手首^こを握る手に力をこめ、おもむろに立ち上がった。背の高い彼に間近で見下ろされて杏子が驚いていると、彼はにつこり笑いながら言った。

「——むこうの部屋に行きましようか」

* * *

リビングから続く六畳間には、紺色のカバーがかかったシングルサイズのベッドがあった。ベッドサイドには小さなチェストとランプが配置されており、チェストには文庫本が無造作に置かれている。

杏子は腕を引かれて薄暗いその部屋に連れこまれ、勢いよくベッドの上に押し倒された。すぐに体の上に覆^おいかぶさってきた彼は、呆然とする杏子を見下ろして言う。

「誘ったのは、あなただから……もう止まりませんよ」

リビングから差しこむ光の逆光で、彼の表情は見えない。

名前すら知らない男とこんなふうになっていることに、杏子の頭はついていけず混乱した。

彼が身を屈^{かが}めて、こめかみに口づけてくる。びくりと引きつる杏子の体の上を、確かめるように大きな手が這^はい回った。Tシャツの裾から入りこんだ手に素肌を撫^なでられて、杏子の背筋をぞわりとした感覚が駆け上がる。そのままブラジャー越しに胸に触れられ、焦って声を上げた。

「ま、待って……」

「雨で濡^ぬれて湿^{しめ}ってる。……脱がせますよ」

杏子の言葉は無視し、止める間^まもなく背中^{せなか}に回った彼の手がホックをはずす。Tシャツとブラジャーを頭から引き抜かれ、無防備な姿にされた杏子は、内心パニックになった。

（どうしよう——どうしよう、私）

彼に対してあんな言い方をしたさっきの自分を、引っぱたいてやりたい。そんな強い後悔で、胸がいっぱいだった。

思い返せば、自分の言葉は彼が怒って当然のものだ。ずぶ濡れの自分を厚意で家に招き、服を乾かしてもてなしてくれたのに、彼が好意を仄^ほめかした途端、わざとひどい言い方をして傷つけた。実際にこんなことをするつもりはなかったのに、彼になんと言ったらわかってもらえるのか、混乱して言葉がまったく思い浮かばない。

リビングからの明かりで真っ暗ではない部屋の中、肌を晒^{さら}していることが恥ずかしく、不安になった。そんな杏子の表情を見た彼は、ふと視線を和^{やわ}らげて笑う。

「……怖がらないでください。本当に嫌がることはしませんよ。優しくしますから」

そう言っただけは杏子の肩に口づけ、手のひらでそつと肌を辿った。

「……細いですね。強く抱くと……折れちゃいそうだ」

「あっ……」

肩から首筋に唇を這^はわされると、ぞくりとする。耳の後ろを舐^なめられ、耳たぶを軽く噛^かまれて、

杏子は思わず首をすくめた。

「や、……っ……」

「耳、弱いですか？」

ささやかれる声に心臓が高鳴った瞬間、耳の中に舌を入れられて、杏子は身を振る。

「あっ……」

体の上を這い回っていた手が、胸をやりわりと掴んだ。頂をきゅつと指のあいだに挟みこまれ、杏子はその鋭い感覚に息を詰めると、彼がひそやかに笑う。

唇でもう片方の胸を口に含まれて、濡れた感触に体が跳ねた。優しく吸って舌で転がすようにされると、一気に感覚が鋭敏になり、杏子の体温が上がる。

「んっ……や、あっ……」

ときおり強く吸われるたびに、勝手に体がびくびくと震えた。胸のふくらみに音を立てて口づけた彼が、体を起こして柔和な笑みを浮かべる。暗さに慣れた目で見えたその表情に、杏子はまた動揺した。

「……ああ、俺の名前は、加賀つていいいます。加賀——雪成」

体を起こし、杏子のハーフパンツを脱がせながら、彼はそう自己紹介する。こんな状況で名乗る呑気さに、杏子はますます混乱した。ハーフパンツを床に放り、へそのあたりにひとつキスを落として、彼——雪成が下着に手をかけてくる。杏子は慌てて声を上げた。

「ま、待つて。……私、謝りたいの、あなたに」

「何をです？」

「あなたに……その、下心があつて、私を家に入れたんじゃないかって言ったこと。ごめんなさい、私、本当にひどい言い方をして……だから」

「ああ、いいんですよ、別に」

雪成はなんでもないように言うど、杏子の手を取り、指先に口づけてにっこり笑う。

「気にしてません。むしろ、そう思ってくれて全然かまわないです。——俺はもう、やめる気はないので」

「……えっ」

状況に不釣り合いなほど、彼の笑顔は爽やかだ。

呆然と見つめる杏子に、雪成は言った。

「なんだろうな、あなたの言葉で、俺の中の変なスイッチが入っちゃったみたいです。なんていうか、『そんなに挑発するなら、応えてやらなきゃ』みたいな」

「……そ、んな」

——だとしたら、それは自業自得だ。動揺しながら、杏子はどうにかして彼を思い留まらせることはできないかと考えをめぐらせる。その最中、指先を舌で舐められてどきりとした。

「あっ……」

「でも、ひどくするつもりはありません。怖がらせたくもないし……。うんと優しくしますから」
杏子の混乱はピークに達している。自分の言葉でスイッチが入ってしまったらしい雪成を止める

ことは、もう無理なのだろうか。そう考えているうちに彼の手が再び下着にかかった。杏子は強くその手を押し留める。

「……っ……」

杏子が必死で手に力をこめると、雪成は困ったような顔になる。彼は一旦杏子の下着から手を離れた。

「……困ったな。嫌がることはしたくないけど——電気を消したらいいですか？」

聞かれた杏子は、思わずうなずく。

雪成は微笑^{ほほえ}んで杏子の頬を撫^なでた。

「オーケー。……じゃあ、ちょっと待ってて」

彼はベッドから下り、電気を消しにリビングへ行く。そんな彼の背を呆然と見ながら、杏子は内心、焦りに駆り立てられていた。

（待って……別に私、暗ければいいって了承したわけじゃ）

今すぐ逃げ出したほうがいいと思いつつも動けずにいると、雪成が電気を消して戻ってくる。どうしようかと心臓をばくばくさせている杏子をよそに、彼はベッドサイドでVネックのカットソーを脱いだ。

細身だがしなやかな印象の上半身があらわになる。薄闇に浮かぶそのシルエットに、杏子はどきりとした。そのままベッドに上がってきた雪成は、杏子の瞳を見つめて甘いしぐさで額にキスをし、下着を脱がせた。

一体どうしてこんなことになってしまったのだろう。そんなことを考える杏子の膝を押し、雪成が足のあいだに体を割りこませてくる。

杏子に覆^{おお}いかぶさり、胸の頂^{たてうへ}に吸いついた彼の指が、そっと花弁を割った。

「は……っ……」

わずかに潤^{うる}んだ蜜口を、遠慮がちな指が撫でてくる。愛液のぬめりを借りて花芯^{かしん}に触れると、じんと痺^{しび}れに似た感じがして、思わず杏子は彼の体を膝で強く挟みこんだ。

「あっ、あ……っ」

杏子の反応を見るみたいに、雪成は微妙に指先の力の加減を変える。途端に潤みはじめた蜜口をときおり指がいたずらに辿り、そのたびにかすかに濡^ぬれた音が響いた。

「……んっ……」

やがて入り口をくすぐっていた指が内部にもぐりこみ、隘路^{あいろう}をゆっくり進んだ。硬い指が体の内側をなぞる感触に、杏子の体がじわりと汗ばむ。根元まで指を埋められ、奥で少し動かされると、中が勝手に反応して強く締めつけた。

「は、あっ……」

「奥、ビクビクしますね。……このへんが好きですか」

「待つ、……や、あっ……」

感じるところで指を動かされ、思わず声が出た。

ひとしきり杏子の反応を確かめるように動かしたあと、雪成は指を一旦抜き、数を増やしてま

た奥まで探ってくる。ほんの少し窮屈きゆうくつに感じる内部を硬い指でゆつくり抜き差しされて、肌が粟あわ立った。

溢あふれた愛液で、彼の指が動くたびに濡ぬれた音が出ることに羞恥しゆうち心を煽あおられ、杏子は戸惑とまどう。

「はあっ……あ……う、っん」

（どうしよう——私、こんな……）

——完全に流されている。自分の上にいる男は、顔だけは知っているものの素性はわからず、ついさつきなし崩しに名前を聞いただけの相手だ。それなのに触られてこんなにも感じているのは、彼の触れ方が優しいからだろうか。

自分の反応に杏子が混乱していると、暗がりの中で雪成が笑う気配がした。

「……このまま指でいつて、終わりにしますか？」

「えっ……？」

意外な言葉に杏子は驚く。

「最後までするつもりだったけど……やっぱりやめておこうかな。あなたはためらっているようだし、無理強いはいしたくないので」

彼の言葉を聞いた瞬間、杏子の胸にこみ上げたのは安堵あんどと戸惑いだった。

雪成の印象は複雑だ。話し方は丁寧で折り目正しく、快活で明るい笑顔には、人の警戒心をたやすく和らげてしまうような魅力みりよくがある。だが、こちらの抵抗を笑顔で押し切ろうとするあたりは強引で、彼は見た目どおりの優しい人間ではない気もしていた。

しかし、こうなったそもそものきっかけは、杏子がひどい言葉を投げつけたせいだ。彼はその挑発に乗ったに過ぎない。現に今、こうして行為を途中でやめるという言葉に彼の優しさが垣間見えて、杏子はいたたまれなくなった。

（私が悪いのに……）

身勝手な自分を、雪成は尊重しようとしてくれている。

そう考えると、杏子の心がぎゅつと痛んだ。孝一に一方的に関係を終わりにされ、自分に価値がないと思っていたとき、彼は「そんなことはない」と強く言ってくれた。そのとき確かにうれしかったことを思い出すと、強烈な衝動しょうどうがこみ上げる。気づけば、杏子は雪成の顔を両手で引き寄せ、ささやいていた。

「……して。最後まで」

「えっ」

杏子の言葉に、雪成は驚いたように目を睜みはる。確かについ先ほどまで「嫌」だの「待つて」だのと言っていた自分が急に態度を変えたのだから、驚くのは無理はない。そう思いつつ、杏子は言った。

「……いいの。もう止まらないんだって——さつき言っただでしょ。……あれは嘘だったの？」

「それは」

わざと彼の言葉を復唱してやると、雪成はぐつと言葉に詰まる。彼は驚いているようだったが、杏子もまた、そんなことを言い出した自分に驚いていた。緊張しながら彼の反応を待っていると、

彼はしばらく考えこんだあと、杏子を見つめて言った。

「……いいんですか」

——「今だけ」なら、たとえ行きずりでもなりゆきでも、かまわないんじゃないかという気がしていた。

つきあっている相手以外とこんなことをするのは初めてで、緊張する。だが、このまま突っ走ってしまいたい衝動を、我慢できない。

それは孝一にされたことがショックで捨て鉢な気持ちになっているせいなのか、それとも目の前の雪成の優しい触れ方に流されているからなのかは、わからなかった。

複雑な気持ちを抱えながらうなずく杏子を、雪成は真意を探るようにじつと真剣な目で見つめた。その眼差しにどきりとする。彼は身を屈め、杏子の髪にキスをしてささやいた。

「……優しくします」

その一言に鼓動が高鳴り、じわりと杏子の頬が熱くなる。

あらためて、雪成は杏子の体に丁寧に触れてきた。首筋から鎖骨、胸までを唇で辿り、手のひらで肌を優しく撫でる。

長い指でまた花卉を開かれた杏子は、ぎゅっと目を閉じた。ゆっくり中に指を入れられ、褻をなぞるように触れられて、思わず声が漏れる。

「……っ、あ……」

胸の先端を吸いながら動かされた途端、中がびくびくと反応して、勝手に彼の指を締めつけた。

再び濡れ出したそこは、雪成の指が動くたびに湿った音を出す。杏子はこみ上げる羞恥を必死に押し殺した。

「っ……あ、は……っ、うつ、ん」

「声……我慢しないで、聞かせてください。すっごくかわいい」

雪成にささやかれ、杏子は慌てて首を振る。反応をつぶさに見られていると思うと恥ずかしくてたまらず、彼の顔から視線をそらして言った。

「……も、いいから、早くして……」

「そんなもったいないこと、言わないでください」

肌に口づけを落とし、雪成は笑った。

「きれいですよ、あなたの体。細いのに柔らかくて、触れた分だけどんどん潤んで——うんと声を上げさせなくなる」

「あっ、あ、だめ……っ」

奥の一番感じるところを、指でぐつと押し上げられる。同時に花芯を優しく撫でる動きに一気に追い上げられた杏子は、彼の指を締めつけながら達してしまった。

「はあっ、やっ、あっ、あん！」

強すぎる快感に体がしなった。息を乱してぐったりする杏子の中から濡れた指を抜いて、雪成は目元にひとつキスを落とした。杏子が視線を向けると、彼は腕を伸ばし、ベッドサイドから避妊具を取り出すところだった。

少しの間のあと、膝を押されて入り口に熱を押し当てられ、杏子は緊張で息を詰める。

「……ん……っ……」

——雪成がゆつくりと中に入ってきた。入り口のわずかな抵抗を硬く張りつめた切っ先が割り開き、重い質感を持つてじりじりと押し進んでくる。杏子はシートを引き寄せて、それに耐える。

何度か腰を引いてはまた押しこまれる動きに、杏子は思わず声を漏らした。

やがて慎重に奥まで入ってきた雪成は、杏子の顔を覗きこんでささやく。

「……苦しく、ないですか」

「……っ……」

本当は、根元まで埋められた大きさが少し苦しい。杏子は雪成の首に腕を回して彼を引き寄せると、浅く息をしながら小さな声で言った。

「少し……、動かない、で……あっ」

「いいですよ。平気になるまで、じっとしてますから」

雪成は笑い、杏子の頬や瞼にキスをする。なだめるみたいにあちこちに唇で触れられて、次第に杏子の体から緊張が抜けていった。

「……はあっ……」

体内の雪成を無意識に締めつけると、彼が軽く息を詰める。快感をこらえるようにわずかに目を細め、雪成は緩やかに腰を動かした。

「……っん……あ、あ」

反応を見るようにゆるゆると揺すられると、彼の大きさに馴染んだ内部が徐々に潤み出す。重い質感にときおり奥を突かれ、じんとした快感で呼吸が乱れた。杏子は吐息混じりの声で言う。

「っ、……動い、て……」

やがて開始されたその腰の動きに、思わず杏子の口から声が漏れる。浅く引いて奥に押しこむ動きを何度かされると、中を埋め尽くされる感覚に体温が上がり、杏子は思考が乱れていくのを感じた。

「あ、はあっ、……ん……んっ……」

硬い熱に押し広げられ、突き上げられる動きに、体の奥からじわじわと甘い快感が広がる。

驚くほど感覚が鋭敏になり、些細な動きですら感じて、そんな自分に戸惑いながら杏子は雪成を見つめた。少し眉を寄せて杏子を見下ろした彼の目には、欲情が滲んでいる。その視線を意識した途端、杏子の体の奥がとろりと潤んだ。

「あっ……」

最初は気遣いつつ動いていた雪成は、杏子の反応に煽られたように徐々に動きを大きくした。

揺らされるたびにぞくぞくとした快感が背筋を走り、杏子の内部は屹立を強く締めつける。雪成はときおり息を吐いては熱を孕んだ眼差しを向けてきて、杏子の心はじわりと愉悅を感じた。

好意を寄せられて嫌だった反面、求められて満足している自分がいることに気づいた杏子は、ひそかに動揺する。

（好かれるのは嫌なのに……どうしてこんな）

蜜みたいな快感が、次第に体の奥にわたかまっていくな。いつそ何もかもわからなくなりたくて雪成の背中に爪を立てると、彼は一瞬顔を歪め、ぐっと奥を突き上げてきた。

「あつ……ん……」

（気持ちいい……あ、もう、いつちゃう……）

「……中、ビクビクしてる。……いきそうですか」

快感を押し殺したような雪成のささやき声に、色気を感じる。息を乱した杏子が小さくうなずくと、彼は腰をさらに押しつけ、杏子の奥を突いた。

「あつ！ はあつ、ん、あつ……」

今にも達してしまいそうなくらいの快感に、杏子はただ目の前の体にしがみつく。笑みを滲ませた彼は、律動を緩めないまま言った。

「俺もいきそうです。——でも、いくのがもったいないな……」

彼の言葉に、杏子の心がじわりとうずいた。

穏やかなのにどこか熱っぽい雪成の抱き方は、驚くほどの快感をもたらす。彼も感じているのかと思うと、杏子は面映ゆさをおぼえた。

雪成が徐々に律動を速め、杏子は喘ぎながらしがみつく手に力をこめる。

「はあつ……あつ、あつ……！」

——熱にうかされたような快楽が、体の奥で弾けるのを感じた。

* * *

窓の外ではまだ、雨の音がしている。

体の熱が冷めていくのと同時に、頭の中も冷静になっていった。

ポツポツと窓を叩く音と、暗い室内の湿り気を帯びた空気を感じているうちに、杏子はいたたまれなくなっていく。だるい体を持て余しながらしばらく雨音を聞いていたが、やがて乱れたベッドから体を起こす。

自分の背後に横たわっていた雪成をちらりと振り返ると、杏子は言った。

「……私の服、返してもらっていい？」

起き上がった雪成はズボンをおさなりに上げると、上半身は裸のまま洗面所に向かう。

やがて彼が持ってきた杏子の服は、乾燥機の熱を孕んで温かった。

立ったまま寝室の入り口にもたれ、暗がりの中で服を着る杏子を眺めていた雪成は、やがて口を開く。

「——名前を覚えてくれませんか」

杏子は一瞬動きを止め、目を伏せると、感情のこもっていない声で答えた。

「……どうして？」

「知りたいので」

「必要ないでしょ」

杏子の答えに、雪成はじつと視線を返す。

「……どうしてですか」

食い下がる彼とあえて目を合わさず、杏子は答えた。

「——もう会わないから」

なぜ自分は進んで彼と関係を持ってしまったのだろう。

恋人でもない相手とのゆきずりの行為など、初めてだ。

そんな行動に踏み切ってしまったことをふしだらに感じると同時に、彼が寄せてくれた好意に甘えすぎたという反省が募る。

（だから、もう……会わない）

こんなのは、今回だけだ——そう思っただけで黙りこんだ杏子を見つめ、雪成は言った。

「俺は途中でやめると言ったのに……それでもいいって言ったのは、あなたですよ」

「……っ……」

確かにそのとおりで、杏子は返す言葉に詰まる。雪成は返事を待たずに続けた。

「俺はあなたが好きです。名前も知らないけど……ずっとバス停で見ている、気になっていた。今日、あなたが泣いてるのを見てますます気になったし、放っておけないって思った」

雪成の言葉を気まぐすく思いながら、杏子はブラウスのボタンを留める。

「抱いたことは、後悔していません。むしろ俺は前よりもっと、あなたのことが欲しくなった。あ

なたが元彼と別れて傷ついたのはわかるけど——俺とちゃんとつきあうことを、考えてみてくれませんか」

（ああ……どうしよう）

自分のした行動の結果とはいえ、こんなふうに言われると、なんと返せばいいのか悩む。

今は誰ともつきあう気にはなれないし、恋愛する気力もない。そう思いながら、杏子は重い口を開いた。

「……ごめんなさい」

衣服を整えた杏子は、雪成の顔を見ずに謝った。

「本当にごめんなさい。私、あなたに八つ当たりなんかして——反省してる」

杏子の言葉を、雪成は黙って聞いている。杏子は言葉を続けた。

「あなたの気持ちはうれしいけど、私、そんなふうに思ってもらえるほどの人間じゃない。それに正直……好きとかもう、いいの。恋愛のことは今は全然考えられないし、だからあなたとはつきあえない」

すべて本心だった。

孝一に受けた仕打ちは、まだ自分で消化しきれていない。あんなふうに傷つけられるなら、恋愛などもうたたくさんだと思う。

杏子の中に、あらためて彼に申し訳ないと思う気持ちがこみ上げていた。親切にしてくれた彼の気持ちを、自分は踏みにじるような真似をしてしまった。

「あなたを振り回したりして、本当にごめんなさい。私、もう……帰るから」

「待ってください」

立ち上がった部屋を出ようとした杏子の行く手を、突然雪成の体が遮る。杏子は肩からこぼれ落ちた黒髪を払い、内心焦りながら視線を泳がせた。

「……そこ、どいて」

「——じゃあ、体だけならどうですか」

唐突に彼が告げた言葉に驚き、杏子は思わず顔を上げる。

「……………えっ？」

「恋愛が嫌なら、体だけでも……俺にくれませんか」

——この男は一体何を言い出すのだろう、と杏子は思った。

自分のことが好きだ、つきあうことを真剣に考えてほしい——そう言った彼に、自分は先ほどきっぱり断つたはずだ。それで話は終わったと思っていたのに、なぜいきなりそんな提案が出るのかわからない。

雪成は手を伸ばして、困惑する杏子の頬に指先で触れた。そのしぐさに杏子がどきりとしていると、彼はじつと見つめてくる。

「すみません、突然こんなこと言い出して。体だけとはいっても、あなたを軽く扱う気なんてまったくありません。むしろ誰よりも……大事にしたい」

動揺し、黙りこむ杏子を見下ろしながら、雪成は言葉を続けた。

「もちろん、本当はあなたの気持ちに欲しい。でも、それができないなら、体だけでも欲しいです」

「……そ、んな」

杏子は混乱する。突然言い出されたことに、咄嗟に言葉が出てこない。

「大事にします。あなたが嫌がることは絶対にしないし、誰よりも優しくしたい。満足するようにいっぱい尽くしますから、これからも俺と会ってもらえませんか」

「な、何言ってるの……」

杏子の顔が、じわりと熱を帯びる。

自分がとんでもないことを言っていると、彼はわかっているのだろうか。

(別に、つきあう相手に不自由してなさそうなのに……)

むしろ見た目も性格も、かなり女性にもてそうな気がする。そんな彼が、なぜ自分に執着するのかわからない。困惑する杏子に、雪成は問いかける。

「……駄目ですか」

雪成は人好きのする甘い顔立ちに懇願の表情を浮かべ、杏子を見つめる。

杏子は言葉を探しながら言った。

「さっきも言ったけど、私、本当に今は……恋愛する気、ないの。だからあなたがそばにいても、それが無駄になるんだったら」

「無駄じゃないです。いつかあなたが好きになってくれるまで、努力するつもりなので」

杏子は迷い、曖昧に視線をそらす。彼は本当にそれでいいのだろうか……と思った。杏子が恋愛する気がなくても、体だけ手に入れて、はたして満足できるものなのか。

(そもそも体だけの関係なんて……私は望んでないのに)
先に変な絡み方をして煽ってしまった罪悪感があるせいか、彼の申し出を強く拒否できない自分に、杏子は困惑する。

——断れないのは、さっき抱かれたのが本当は嫌ではなかったからかもしれない。

体の奥にはまだ、甘ったるい快樂の余韻が残っている。じわりと上がる体温を意識し、杏子は黙りこんだ。そんな杏子を見つめ、雪成は笑った。

「むずかしく考えなくていいです。俺が勝手に大事にするので、あなたはただ甘やかされていくだけ。それで……いつか俺を好きになって、恋愛してくれたらうれしい。そうやってほしいなっ
て思ってます」

あまりにも自分に都合のいいことを言う彼を、杏子は顔を上げてじっと見つめた。

気持ちを返さなくてもいい、ただ甘やかしたい——そんな彼の言葉が、理解できない。

雪成は杏子につこりと笑いかけた。

「名前、教えてくださいませんか」

(……また、この笑顔……)

彼は絶対、自分の笑顔の魅力をわかっているはずだ。見る者の警戒心を解き、逆らえなくなるような笑顔から、杏子は視線をそらす。

ためらいはいつまでもまとわりついて、なくなならない。しかし彼を無下にもできず、小さな声で答えた。

「……杏子、よ」

「じゃあ、これから、杏子さんって呼びますね」

雪成はそう言ってうれしそうに笑った。

——恋愛じゃない、一方通行な関係。

杏子と雪成の関係は、そんなふうにはじまった。

五月も残りわずかになった平日の昼下がり、図書館内はほとほとの人でにぎわっている。杏子は目の前にうずたかく積まれた予約図書のバーコードを、一冊ずつ読み取っていた。

市内の他の図書館から取り寄せた予約図書は、結構な数だった。バーコードを読み終えると、プリントアウトされた予約者の名前が書かれた紙を本に挟みこみ、貸し出しカウンターのすぐ後ろにある本棚に並べていく。予約した人が来館した際には、図書カードのバーコードを読み取るとパソコンのアラートが鳴り、本が到着していることを知らせる仕組みになっていた。

ひと息ついた杏子は、ちらりと窓の外に目をやる。

梅雨入りが近いからか、ここ数日の天気は不安定で、今日も空を厚い雲が覆っていた。湿度も高く、空気にはなんとなく雨の気配が漂っている。

(……今日は降るのかな)

——雨の予感、心をざわめかせる。

ただの顔見知りだった雪成と体を重ねてしまったのは、つい五日前のことだった。

思い返すたび、杏子は暗澹たる気持ちになる。

雪成が、以前から自分に好意を持っていたという事実は、恋人に捨てられたばかりの杏子にとっ

て、どうしても許せないことだった。衝動的にわざとひどい言葉で彼を煽り、傷つけたが、あれはどう考えても自分が悪かったと思う。

孝一に一方的に関係を断ち切られた自分は、確かにあのとき恋愛に対してうんざりしていた。

しかしだからといって、自分に好意を寄せてくれていた雪成をわざわざ傷つける権利はない。

濡れていた自分を親切で自宅に招き入れてくれた彼に、「家に連れこんだのは、下心があったからに違いない」と発言したことを思い出すと、自己嫌悪が湧いた。その言葉が引き金となり、杏子は彼と関係を持つてしまった。

杏子はうつむき、ため息をつく。

ひどい言葉を投げつけた自分に、雪成は最後まで優しくかった。挙句にそんな自分と「体だけでもいいからつきあいたい」と言い出したときには、心底驚いた。

恋愛する気はない自分を、一方的に大事にしたいという彼の思考は、今でも理解できない。彼はいずれ好きになつてくれればいいと言ったが、杏子の中には迷いばかりがあった。

(別に、私——『体だけの関係ならいい』なんて言っただけ)

彼とのセックスは、確かによかった。雪成の触れ方は優しく、彼のもたらす熱に、思いがけず溺れた。

それでも、また会いたいかと聞かれたら、答えはノーだ。

そもそも自分はあるとき勢いで彼と寝てしまったようなものだし、よく知らない男と何度も会いたいとは思わない。

自分の名前を教えたのは失敗だったかなと、杏子は少し後悔した。教えたのは下の名前で、それ以外は何も教えていない。しかし、教えたことで彼に今後を期待させてしまったのなら、あまりよくないことだったのかもしれない。

電話番号とメールアドレスは、最後まで知りたいと粘られたが、断った。

『じゃあ杏子さんに会いたいときは、どうしたらいいんですか』

どこか不満そうな顔でそう聞いてきた雪成に、杏子は目をそらして答えた。

『……雨の日に、バス停で会えるでしょ』

——彼は、雨の日だけバスを使うのだという。

少し意地悪だったかもしれないが、そもそもこちらは彼には会いたくはない。

しかも自分は毎日決まった時間に仕事が終わるわけではなかった。

実際は彼に会うことはそれほどないのではないかと思っているものの、気がつけば天気を気にしてしまっている。そんな自分を、杏子は持て余していた。

（会いたくないから天気が気になっているだけで……別にそれ以外の感情なんか……）

パソコンに向かいながら、杏子は鬱々と考える。

ここ数日は、降りそうで降らない天気が続いていた。……今日もこのまま保ってほしい。

余計な考えを振り切るように、杏子はしばらく仕事に没頭した。

小一時間経った頃、ふとエントランスで濡れた服を払っている来館者に気がつき、どきりとする。顔を上げると、窓はいつのまにか無数の細かい雫で濡れていた。

——とうとう雨が降り出したらしいと知って、杏子は複雑な気持ちになる。席を立ち、窓際に立って、外を眺めた。

窓を叩く雫は次第に多く、激しくなっていく。本格的な雨の予感に心がざわめいた。

（もし夕方まで、降ったら……）

自分は——どうしたらいいのだろう。

今日は午後五時過ぎに仕事が終わる。窓の外を気にしつつ、杏子は落ち着かない気持ちで業務に戻った。

* * *

昼過ぎから降り出した雨は、若干雨足が弱くなったものの、夕方になってもまだしとしと降り続けていた。

午後五時半、図書館の軒下で、杏子は数日前からロッカーに置いていた傘を広げた。

（やっぱりいるのかな……）

脳裏に浮かぶのは、一人の男だ。

時刻を確認すると、バスが来るまであと五分ほど時間がある。図書館の敷地を抜けて歩道に出るとき、杏子は自分が緊張していることに気づいた。こんなふうに心を乱されている状況に居心地の悪さを感じながら、バス停に近づく。